

「桜」に町づくりを掲げて継続する

春の陽射しを浴びながら国花苑の散策をしていると、開設から半世紀余りの歳月が流れて充実感を増していく光景に、継続の大切さを感じる。「桜を活用して郷里に心のふるさとを作れないか」と、町出身で東京在住の文学研究者から提案され、桜の苗木二百種、二千本の植樹から始まったという。それから現在までの間にJR「井川さくら駅」を新設し、「桜の森彫刻コンクール」を十年続けて、賞に選ばれた作品(四十一点)を公園内に展示している。人口四千三百人余りの自治体が、「桜」を掲げて継続的に町づくりをしてきた。

実は、国花苑を歩きながら考え事をしてきたのだ。

この日は、秋田市の自宅を朝八時に出て、旬の山菜を求めて五城目の朝市に十数年ぶりに訪ねたが、ガランとした朝市の光景に唖然となり、撮影を断念して国花苑に来たのだ。数百メートルの朝市通りに、ひと桁の店と買物客しか見当たらず、人口減少の厳しい現実を目の当たりにした。ミズを綺麗に並べているおばさんに話を聞くと、「後を継ぐ人がいなくて、店も二十分の一に減って…」と嘆いていた。

井川と五城目。隣接する二つの町は「平成の大合併」にも関係することなく現在に至っている。少子高齢化の進行する課題は共通しているが、交通や産業に対して取り組む姿勢が違っていたようだ。

五城目から一日市駅(八郎潟駅)までは鉄道が敷かれていたが、五十年ほど前に廃線となった。私は羽後飯塚駅から高校へ通っていたので、同じ駅を利用する井川の学生は可哀そうであった。冬は自転車も使えず、二〜三キロほどを歩いて来るのだ。

農林業が衰退する対策として井川は、「スズキ部品秋田」を誘致したが、付近の国道沿いにショッピングモールが設けられ、カラフルな店舗が立ち並んでいる。

先日、統一地方選があつて県と市町村議、首長が選ばれた。少子高齢化に直面した課題に、どう向き合おうとしているのか。朝市の寂しい光景に出会い、不安が増幅しているが…。